

Title	石川県天然記念物調査報告第二輯(石川県編)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.4 (1926. 11) ,p.165(625)- 166(626)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19261100-0166

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

隨筆漫録——妾の異名の外、十六題に就いて記述したもの。
以上は本書の極く一部の紹介であるが、江戸時代に於ける相世
史に興味を有する人に一讀をすすめらる。(武田勝藏)

民謡をたづねて (松川三郎著 博文館發行)

最近、郷土色の豊富な各地民謡の蒐集、紹介、或は其の比較研
究が盛んとなり、それ等に關する種々の著編の書が、公刊せられ
る事は誠に欣賀すべきである。今度、旅行家として知られる松川
三郎氏は、前記の書を上梓せられた。これは、各地民謡の歌詞、
歌調、並に其れに伴ふ舞踊樂器等に就いての見聞、並に各方面よ
りの觀察を輕妙に記述せられたもので、自分は甚だ興味を以て一
讀した。氏は本書の序文に於て、次の如く叙説せられて居る。

民謡は、即ち無名の地方詩人に依つて作られた詩、國民の間に
自然と生れ出た詩、その中には、國民の生活そのもの、或ひは
地方の自然そのものが含まれてゐる。民謡の價値と面白味は、
その點にある。○中 略 私は、こゝでは、單に地方民謡の中、すぐれ
たものを選んで紹介することのみが目的ではなく、或ひは文學
的に、或ひは社會的に、歴史的に、地理的に、いろ／＼の方面
から觀察して、出来るだけはつきりと、その頃の含む地方色と
云つたやうなものを、描き出さうと試みたのである。

本書には、各地民謡の大部分が紹介せられてあるが、猶ほ漏れ
て居るものが若干ある。例へば、對馬の民謡の如きは其の一で、
岡山は、我が西の一孤島ではあるが、島の民謡として紹介せらる

べきものが三四種ある。(雨の降夜節、陽氣節、辛氣節等)殊に雨
の降る夜節は、稍や悠暢で單調ではあるが、長閑な品のあるもの
と思ふ。

序で乍ら附記して置くが、本書の著者も云はれて居るやうに、
民謡は野趣満々真情直露の爲めに、昨今其の歌謠舞踊に、改良を
加へられたものが往々ある。それは眞の意味に於ける民衆的舞踊
の形を失ひ、又ローカル・カラーが褪せてしまふものである。そ
れて改良も、時代適應の改良であれば悪くはないが、それには十
二分注意を拂ふ必要があると思ふ。又最近十數年間、年々歳々に
新作される流行節の傳播力によつて、祖先の殘した貴重な郷土資
料たる民謡が、段々に衰滅して行き、青年の中には、殆んど忘れ
れかゝつて來た時に、先般日本青年館等に於いて、各地の民謡舞
踊が紹介せられて、その保存の必要を世人に知らしめた事は、自
分等のやうに、民謡保存を叫ぶものゝ感謝に耐へぬ處である。

最後に、本書は、俄に首肯し難い一二の説もあるが、民謡研究
の好參考書として民謡愛好者、研究者に一讀を勧めると共に、郷
旅の好伴侶の一である事をも附言して置く。(武田勝藏)

石川縣天然記念物調査報告第二輯

(石川縣編)

本書は、石川縣内に於ける、天然記念物保存の目的を以て、大
正十四年度中に行はれた實地調査の記録である。収録せられてあ
るものは「はまなす」外四十余件である。記述は、所在地、現状
由來、保存の價値等の細目に分つて頗る詳細に亘り、加ふるに、

鮮明な八十餘の圖版が挿入せられてある。

本書、吉田村の一里塚の條に、本邦一里塚の沿革が、參考資料を擧げて説明してあるから、その大要を紹介し度いと思ふ。

往古は、三十里に一驛を設置する制度があつて、旅行者に里程を知らしめる利があつたが、未だ一里づつの里標はなかつた。吾妻鏡に、奥州の藤原氏が、白河より率土濱に至る廿一日の行程に、一里毎に笠卒都婆を建てた如きは、蓋し後世一里塚築造考案の權輿であらう。織田信長の時、三十六町を一里として近畿諸國に一里塚を造つたと云ふが、(本朝世事談綺) 徳川時代となつて、幕府は、慶長九年二月に、東海東山等の諸街道を修理し、始めて一里塚を築かした。即ち日本橋を基として、七道に亘つて三十六町毎に塚を築き、その上に榎を植えて里程標となし、爾來諸國に造られた。この一里塚は、明治時代に於ける交通路の改正變更の爲め、急激に廢絶して、現存するものは小數で、石川縣下に於ては僅に吉田村に一ヶ所を存する位である。

塚の上に樹木を植えた事に就いては、發案者を信長と云ひ、秀光と云ひ、或は又家光と傳へ、榎の木は、餘の木の聞き違へによつたと云ふが、何れも信ずるに足らない。(柳菴隨筆、千曲之眞砂雨窓間話等) 榎樹は、温帯より暖帯に亘つて、極めて普通なる樹木なるを以て得るに易く、根は深く廣く擴がつて風に堪へ、且つ大木となり、高く聳えて遠方より望み得られるので、これを撰擇したものである。支那にては、一里毎に土墩を築き、又は槐木を植えて、目標となしたので、(事林類聚、北史等) これにならつたもので、又百家説林續編蒼梧隨筆に載せた「榎と槐と其の木

相似て、槐は少にして榎木は多きものゆゑ、得るに安く、最松杉と異にしてひかげをなして大木となるを以つて、槐に代つて塚の木となせしなるべし」と云ふ説は、眞に近きが如く思はれる。

加賀藩に於ける一里塚は、慶長九年、加越能三州の道路測定の上、里塚を築かれたものと考へられ、元祿十一年七月石川郡里正連名上申書に「一里塚は廿六町を一里と仕長短は無之、越中能州も廿六町を一里とす、一里塚は往還道外、脇道又は他國へ越候道筋には前々より無御座」とあれば官道に限つたものと思はれる。

要するに、現存一里塚は、往時に於ける道路の位置、竝に交通の状を知る貴重な資料なるを以て、出来るだけ保存の設備を施す必要があらう。現に東京府下瀧川の一里塚は道路擴張の爲め撤廢の運命と定まつたものを、澁澤子爵等名士の奔走によつて辛じて取り止め、今は記念物として立派に保存せられて居る。

最後に本會はこの調査に従事せられた縣調査囑託市村塘、安田作次郎の兩氏の勞に甚大の敬意を表し、且つかく有益の書を度々寄贈せられたる石川縣に對して、深謝の意を表すものである。

(武田勝藏)

武庫地方郷土資料目録

(武庫郡神職會編)

近年、郷土史研究の氣運は、年と共に進展し、それに關する編纂上梓が企てられると共に、その史料展覽會が、盛んに開催せられる事は、誠に慶賀すべき祥事である。この展覽會は、親しく史料實物に接するので、興味もあり、參考となる處多夫であるが、